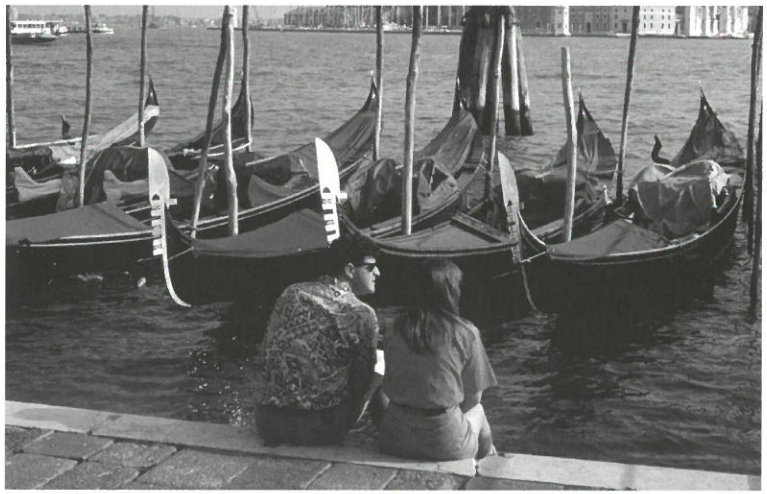
「極上」の人生、「極上」の旅



出会いと別れ…
そして感動と喜び
「旅」は心のゴハンです。
「旅」はあなたが主人公。いくつもの物語をつくります。
世界を舞台に感動のメロディーを奏でてみませんか？
あなたと共に――――JTB

JTB
Your Global Lifestyle Partner

JTB法人東京
音楽・舞台芸術プロジェクト推進部
東京都中央区日本橋1-13-1 日鐵日本橋ビル2階
03(3273)8245

20th Anniversary
Tokyo New City Orchestra

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA TOKYO CHORAL SOCIETY

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA
TOKYO CHORAL SOCIETY

東京ニューシティ管弦楽団
第71回定期演奏会
東京合唱協会
第20回定期演奏会

2010年11月12日(金) 19:00開演

東京芸術劇場大ホール
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall

主催：東京ニューシティ管弦楽団・東京合唱協会

Members

東京ニューシティ管弦楽団

音楽監督・常任指揮者　内藤 彰　　コンサートマスター　鈴木 順子※
首席客演指揮者　曽我 大介　　客員コンサートマスター　浜野 考史
客演指揮者　アンドレイ・アニハーノフ

●第1ヴァイオリン
伊東 佑樹
上田 博司※
大竹 奏※
小澤 郁子※
剣持 由紀子※
小島 光敬
笹井 飛鳥※
徳井 えま※
中川 さと子※
中澤 真理子※
中村 朱見※
山川 奈緒子

●第2ヴァイオリン
○富山 ゆりえ※
荒巻 泉※
岡田 邦子※
栗原 りか※
塩野入 清美※
高階 久美子※
竹内 弦※
山江 洋子※

●ヴィオラ
○中山 良夫※
桜井 多美子※
浅川 文※
宇佐美 久恵
久郷 寿実子※
髙瀬 有美※
竹鼻 江美子
堀江 冬子※

●チェロ
○植草 ひろみ※
齋藤 章一
大島 純※
葛西 英一※
冨成 倫子※
船田 裕子※
星野 敦※
望月 直哉※

●コントラバス
○徳高 宏行※
青山 幸成※
大黒屋 宏昌※
本多 学※

●フルート
○井ノ上 洋※
福田 将史※
丸田 悠太※

●オーボエ
○徳田 振作※
池田 祐子※
齋藤 潔※

●クラリネット
○西尾 郁子※
松元 香※
吉田 記子※

●ファゴット
○藤田 旬※
○松里 俊明※
霧生 吉秀
森田 一途美※

●ホルン
○猪俣 和也※
津守 隆宏※
飯島 さゆり
小川 正毅※
庄司 友世※
広川 実
松浦 光男

●トランペット
○中西 清一※
鎌田 朋幸※
後藤 慎介※
依田 泰幸※

●トロンボーン
○西岡 基※
恵藤 康充※
南城 友恵※

●テューバ
稲増 優乙※

●打楽器
○藤城 佳之※
阿部 剛※
大河原 渉※
小山 有紀※
辻本 洋一※
出戸 絢奈※

●ハープ
平島 さより※
平山 菜津子※

●ピアノ
小埜寺 美樹※

50音順
○印は本日の首席奏者
※印は本日の出演者

パーソネルマネージャー
山川 奈緒子

ステージマネージャー
青木 勝弘

ライブラリアン
長田 康宏

東京合唱協会

音楽監督・常任指揮者　内藤 彰

指揮者
内藤 裕史

コンサートマスター
星野 淳

サブコンサートマスター
池本 和憲

パートリーダー
有銘 哲也

ソプラノパートリーダー
鈴木 由美子

●ソプラノ
五十嵐 恵美
大場 恭子
栗田 真希子
鈴木 光子
鈴木 由美子
千葉 真智子
芳賀 惠
只野 裕美子
大塚 亜希子
高居 洋子

●アルト
石田 幸子
坂本 晶子
三宮 美穂
鈴木 マチ子
田村 真壽美
中川 遊子
平井 淳子
山川 一江
古市 尚子
村山 雪絵

●テノール
粟飯原 俊文
有銘 哲也
池本 和憲
内藤 裕史
永井 崇多宏
永澤 健
植木 洋敬
清見 卓
坂尻 巌
皆川 信弘

●バス
石井 敏郎
植田 真史
小野 慶介
木谷 圭嗣
木場 義則
清水 一成
菅井 寛太
瀬川 倫弘
東嶋 正彦
松井 永太郎

マネージャー
田村 真壽美

男声インスペクター
内藤 裕史

女声インスペクター
鈴木 光子

〔事務局〕
事務局長　高松 正典　　営業・企画　上原 久幸　森田 祐世
事務局スタッフ　桜井 聖子　福島 貴子　森本 芙紗慧　相吉澤 絵里　石本 順子　山本 ふさこ
チケット・デスク　武曽 眞紀子　木村 有美子

マーケティング・アドヴァイザー　石井 友二・本田 瑞穂　　イメージコーディネーター　古山 忠男・嵯峨 亮子

Program

指 揮：**内藤 彰** Conductor: NAITO Akira
コンサートマスター：**鈴木 順子** Concertmaster: SUZUKI Junko

髙田 三郎／「五つの民俗旋律」～管弦楽のための～〈初演〉

SABURO TAKATA / 5 Melodies of Japanese folklore for Orchestra

Ⅰ. 北海荷方節（北海道）Hokkai Nikatabushi
Ⅱ. かくま刈（山形）Kakumagari
Ⅲ. 子守唄 Komoriuta
Ⅳ. かんちょろりん節（福島）Kanchororinbushi
Ⅴ. じょんがら節（青森）Jongarabushi

髙田 三郎／ソプラノ、バリトン、ナレーター、合唱と管弦楽のための「無声慟哭」（詩：宮沢賢治）

SABURO TAKATA / 'VOICELESS LAMENT' for soprano, baritone, narrator, choras and orchestra (Poem by KENJI MIYAZAWA)

ソプラノ：**百合 道子**　バリトン：**清水 宏樹**　ナレーター：**南 美希子**

休憩15分—intermission [15']

プーランク／スターバト・マーテル

Francis Poulenc / Stabat Mater

ソプラノ：**芳賀 惠**（団員）　**千葉 真智子**（団員）

Ⅰ. Stabat Mater Dolorosa-聖母は悲しみに沈み十字架の下にたたずむ
Ⅱ. Cujus Animam Gementem-嘆き憂い悲しむ聖母の魂は
Ⅲ. O Quam Tristis-聖母はどんなに悲しみ傷ついたか
Ⅳ. Quae Maerebat-慈しみ深き聖母は嘆き悲しむ
Ⅴ. Quis Est Homo-聖母の姿に涙しない者があろうか
Ⅵ. Vidit Suum-聖母は御子の息絶えるさまを見る
Ⅶ. Eja, Mater-愛の泉なる聖母よ
Ⅷ. Fac, Ut Ardeat-わが心も神の子を愛する火に一緒にくべてください
Ⅸ. Sancta Mater-聖なる母よ
Ⅹ. Fac, Ut Portem-キリストの死をともに背負おう
Ⅺ. Inglammatus Et Accensus-焼かれ焚かれるわが身だけれど
Ⅻ. Quando Corpus-肉体は死んで朽ちるとも

お願い　演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。
他のお客様のご迷惑になる様なご行為は慎しんで頂きますようお願い申し上げます。

平成22年度文化芸術振興費補助金
（芸術創造活動特別推進事業）

TAKATA SABURO

プロフィール

1913年12月18日名古屋に生まれる。父は弁護士。父は謡曲、母は琴を趣味とし、また近くのプロテスタントの教会の日曜学校で賛美歌を習うなど、幼時より音楽的素質を豊かに受けて育つ。中学時代、ベートーヴェンの第5交響曲を聴き、作曲家になりたいと望む。以来ベートーヴェンの「真実を語れ、余は黙せ」を生涯座右の銘とする。

1939年東京音楽学校（現東京芸術大学）本科作曲部卒業。1941年研究科修了。修了作品「山形民謡によるファンダーとフーガ（山形民謡によるバラード）」を作品1として、86才で逝去に至るまで作曲を続ける。その作曲の姿勢は大きく3期に分けることができる。

最初の頃はバッハ、ベートーヴェン、ドビュッシー、ラヴェル、バルトーク、メシアン等の作品を研究して消化吸収、作風に取り入れつつ作曲した時代。「地人会」「蜂の会」の同人として度々発表の機会を持つ。器楽曲、歌曲の作品が多い。主要作品として「ピアノのための前奏曲集」、弦楽四重奏のための「マリオネット」、歌曲「前奏曲（野上彰：詩）」、「パリ旅情（深尾須磨子：詩）」などがある。

決定的な転換期となったのは本日演奏される宮沢賢治の詩による「無声慟哭」である。1964年完成に至るまで8年の歳月をかけ、「死」と向かい続けた作曲を通して、以後「この曲を書きながら死んでも良い」と思う曲しか書く気がしなくなったと述懐している。

作品は自らの内面を深く問う詩によって、人としての真の生き方を探求する作風に変っていく。合唱曲「わたしの願い」、「水のいのち」、「心の四季」、「橋上の人」、歌曲「ひとりの対話（高野喜久作詩）」、「残照（井上靖作詩）」などが主要作品にあげられる。

あたかもこの時期、第2ヴァチカン公会議の決定による典礼の国語化に伴い、その作曲を日本のカトリック司教団から委嘱された高田は、これを神の指名と受けとめ、後半生をこれに捧げ、220曲を全く無償で奉仕したのである。その功績により1992年ローマ法王より聖シルベストロ騎士団長章を受章。彼の全宗教作品はヴァチカンの図書館に収められている。更に宗教曲として「イザヤの預言（1980年）」、「預言書による争いと平和（1983年）」、「ヨハネによる福音（1984年）」を作曲。以上の第3期は真の使命を果たした時期と言えるのではなかろうか。

本日演奏されるもう一曲、「五つの民俗旋律」は、原曲はピアノ曲。1978年 高田江里により初演されている。数年をかけて少しずつ編曲していたが、2000年10月第5曲の23小節の内声部のみを残し、国立音楽大学教授作曲家トーマス・マイヤー＝フィービッヒ氏に補筆を依頼、10月22日天に召された。学生時代より学内オーケストラでホルンを吹き、指揮法を学び、30代には指揮者としても活躍していた 高田にとって、管弦楽曲は最も得意とする分野であり、中でも全力を注いだオペラ「蒼き狼（原作：井上靖）」が度々再演の機会を得ながらいまだに実現しないのは残念である。いつの日かその日が訪れることを切に望んでいる。

高田留奈子

PROGRAM NOTES

片山 杜秀（音楽評論家）
KATAYAMA Morihide

■作曲家、髙田三郎

髙田三郎（1913～2000年）は名古屋に生まれ、東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）に学んだ。師事したのは、ベルリンに学びバッハを崇拝し簡潔な音楽を尊び《海ゆかば》を代表作にもつ信時潔、信時の弟子の理論家、片山頴太郎、やはり信時サークルの一員にしてウィーンでフランツ・シュミットについた細川碧、そしてマーラー晩年期の愛弟子でベルリン・フィルを指揮してマーラー交響曲連続演奏会を催したこともあるクラウス・プリングスハイムである。

髙田がまず憧れたのはドビュッシーやラヴェルだった。それから、師プリングスハイムの先生、マーラーも強く意識した。といっても、ドビュッシーやラヴェルの色彩や官能、あるいはマーラーの清濁も聖俗も併せ呑む宇宙的巨大さに惹かれたのではなかった。髙田がドビュッシーやラヴェルに認めたのは、風や水と同化して心頭を滅却するような清々しく透明で無重力的な感覚であり、マーラーに見出だしたのは、煩悶を乗り越えて悟りとか諦念に至るような一種の宗教心だった。

何しろ髙田は信仰と求道の人。背筋が伸びてキリリとしていた。仏教に親しんだこともあれば、1953年からはキリスト教カトリックの熱心な信徒となった。音楽にもその精神が反映する。余計なものを殺ぎ落とす。享楽的・遊戯的な音楽には、興味がない。苦悩を克服し、透明自在な境地に向かおうとする一途な心を音で表そうと力を尽くす。結局、その態度は、師匠の信時とかなり似る。

そんな髙田がおのれにとりわけ重く課したのは、西洋語とは響きも文法もだいぶん違う日本語という言葉、および雅楽から民謡までの日本伝統の旋律を、西洋音楽とどう折り合わせるかだった。日本人西洋音楽家にとっての宿命的課題に果敢に挑み続けたのだ。近代ドイツ音楽と近代フランス音楽のイディオムを、作曲家一流の禁欲的厳格主義で濾過し、そこに日本の心を融和させようとした人。それが髙田三郎だ。

本日の《5つの民俗旋律》は、日本伝統の旋律への作曲家の関心の総決算であり、《無声慟哭》は作曲家の日本語への取り組みのひとつの頂点をなす曲といってよい。髙田を知るのにうってつけのプログラムである。

■髙田三郎：5つの民俗旋律

元は、愛娘のピアニスト、髙田江里のために1970年前後から書き溜めて1976年に完成したピアノ曲集。そこからまずフルート、ヴァイオリン、ピアノの三重奏のヴァージョン（1977年）が生まれ、それからだいぶん時間を経て、1995年から管弦楽版も作られはじめた。しかし、第5曲の編作途中で作曲家は2000年に逝き、未完部分は娘婿のドイツ人作曲家、トーマス・マイヤー＝フィービヒによって仕上げられた。本日がこの管弦楽版の日本初演（2010年4月、メキシコにて世界初演）。2台のハープ、チェレスタ、打楽器を含む2管編成。民謡旋律は主に近代フランスの流儀と結びつけられる。

第1曲〈北海荷方節〉（北海道）。荷方節というと荷物担ぎの労働歌のようだが、新潟節が詰まり、当て字がされて荷方節になったという。新潟から海路で北海道の江差に伝わったお座敷歌らしい。とにかく賑々しいもの。髙田はその旋律を装飾的に高潮させてゆく。

第2曲〈かくま刈〉（山形）。かくまとは薪にするような雑木のこと。山で雑木を集めて村に担いで帰るときにうたう労働歌。髙田の親しかったフランス帰りの作曲家、平尾貴四男が管弦楽変奏曲の主題に用いた八王子の機織唄などと近い系統の旋律だ。

第3曲〈子守歌〉（青森）。都節音階によるしみじみとしたもの。日本あちこちにありがちな子守歌旋律の青森風の異版。

第4曲〈かんちょろりん〉（福島）。神長老林という漢字が当てられる。鳥の歌声を模して生まれたとも言われ、実際、鳥のはばたきのような振りが付くこともある。髙田も鳴き声風の高音のパッセージを主旋律に幾度も添えている。

第5曲〈じょんがら節〉（青森）。津軽三味線の力強いかき鳴らしを模してゆく。

▌髙田三郎：無声慟哭

髙田三郎は若い頃から宮沢賢治（1896～1933年）を愛してやまなかった。恐らく髙田の気質と賢治のイメージに重なるところがあったからだろう。髙田は西洋音楽とカトリック信仰に献身した人。一方、賢治は農民の生活向上と文学と仏教信仰に身を尽くし、西洋音楽にも憧れた人。まさに髙田の共感できる求道的キャラクターだった。さらに、賢治の代表作のひとつ、童話『風の又三郎』の主人公は、もちろん風の又三郎と呼ばれる少年だけれど、それはあだ名で、少年の本名は偶然には違いないが髙田三郎と設定されている。このことを、いつかラジオで髙田が作曲家の林光と対談したとき林に指摘され、妙に照れていたのを思い出す。

そんな髙田は賢治の詩に基づく一篇の大きなカンタータを遺した。8年もの歳月をかけ、1964年に完成した《無声慟哭》だ。テキストは詩集『春の修羅』（1924年刊）の中に含まれた「無声慟哭」と題する5つの連作。賢治は1922年、最愛の妹をスペイン風邪（新型インフルエンザ）で喪う。その臨終の情景を軸に綴られている。

髙田は幼年期から「死について考えなかったことは一日もなかった」と自ら記している。常人よりも死を過剰に意識し続け、悩んだ。髙田が信仰を求め、カトリック信者になったり、賢治の死を主題とした連詩に引き込まれたりするのも、そのへんに理由があるだろう。「無声慟哭」という、声も無く心の中で慟哭する、内省的で瞑想的な悲しみのかたちも、髙田のひたむきさとよく似合う。実際、作品全体はつとめて大仰さを避け、能のように抑制されている。そこにマーラーから新ウィーン楽派に通じる響き、フランス近代の流儀、賢治の信仰心と関連づけられつつ現れてくる日本伝統音楽のイディオムが、禁欲的に合成され、髙田独特の世界が開けゆくのである。

ソプラノ、バリトン、ナレーターと混声合唱、及び、ハープとチェレスタと打楽器を含む2管編成のオーケストラのために書かれている。「無声慟哭」の5篇すべてがテキストにされる。妹とその分身の白い鳥はソプラノに、賢治自身の声や思いはバリトンとナレーターに、その他は合唱もしくはナレーターに割り振られる。語りの比重が極めて高く、語り方次第で、曲の印象は大きく変わる。

第1曲〈永訣の朝〉。レント。妹の逝くことになる日の朝、妹が兄に「雪のひとわん」を所望する。「別れの水盃」や「死に水をとる」ことなど連想させる。最後にバリトンが、かなり謡曲風に歌う。

第2曲〈松の針〉。アンダンテ。死の床の妹を、永遠の緑、永遠の若さを象徴する松の枝が慰める。

第3曲〈無声慟哭〉。グラーヴェ。最後の方でバリトンが「わたくしは修羅をあるいているのだから」とまたも謡曲風に歌う。管弦楽の後奏は妹の死と家族の悲しみの描写。

第4曲〈風林〉。アレグロ。花巻農学校の生徒を引率しつつ、教師賢治は亡妹を思う。

第5曲〈白い鳥〉。レント。ヤマトタケルが白い鳥に生まれ変わったという日本神話をふまえた詩人の幻想。合唱が信時潔の《海道東征》を彷彿とさせる謡曲調や古代歌謡調で歌う。死と浄化の音楽。

日本フィルハーモニー交響楽団の委嘱作として1964年3月27日、三髙晶子と栗林義信の独唱、横森久の語り、同オーケストラと東京混声合唱団、渡邊暁雄の指揮で初演された。

▌プーランク：スターバト・マーテル

フランシス・プーランク（1899～1963年）はフランス人。ケクランに師事し、作曲家への道を歩んだ。都会のシャンソン調や田舎の民謡調、シャブリエのユーモア、サティの皮肉、ラヴェルの洗練、ストラヴィンスキーの強靭さ等々を自在に入り交じらせ、開放的作風をこしらえていった。悩んで削って純粋さを希求する髙田三郎タイプとはいかにも正反対。俗っぽく楽しい音楽を書かせたら天下一品という定評を、若いうちに得た。

ところが、そんな彼にも転機が訪れた。1936年、ひとつ年下で仲良しの作曲家、フェルーが自動車事故で死んだ。1935年には日本人の管弦楽作品を欧米に紹介すべく催されたチェレプニン賞の審査員を務め、伊福部昭を第1位に選んだ人でもある。この悲劇以来、プーランクの脳裏から死の観念が離れなくなった。そこから祈りが生まれる。プーランク家は元々熱心なカトリック信者。髙田三郎と同じだ。彼は宗教的な音楽をしばしば作るようになった。

その中にはプーランクらしく、これが宗教曲かといった陽気なものもある。真摯だったり清冽だったりするものもある。《スターバト・マーテル（悲しみの聖母）》は後者だ。バッハの受難曲の現代版の趣もある。十字架にかけられ傷つき苦しむキリストの姿を聖母マリアが見て悲しむというラテン語の詩句に作曲されている。カトリック教会がキリストの受難を思い聖母マリアを称えるミサで用いるテキストだ。プーランクは、仕事仲間にして親しい友人だった舞台美術家、クリスチャン・ベラールが、1949年に30歳で早逝した衝撃から、曲を着想した。ベラールがキリストでプーランクがマリアと言っては怒られるかもしれないけれど、まあ、そういうことだ。

1950年の夏に作曲。翌年6月13日、ストラスブール音楽祭でフリッツ・ブッシュ（シャルル・ミュンシュの兄）の指揮により初演。編成は、ソプラノ独唱と混声合唱、2台のハープを含む3管のオーケストラ。

全体は12曲から成り、第4曲と第5曲、第10曲から第12曲までには切れ目がない。

第1曲〈聖母は悲しみに沈み十字架の下にたたずむ〉、とても静かに。バッハ的荘重体にプーランクならではのおセンチな味が入る。

第2曲〈嘆き憂い悲しむ聖母の魂は〉、アレグロ・モルトーとても乱暴に。ヴェルディのオペラのような激情的表現で、取り乱す聖母の姿を描く。

第3曲〈聖母はどんなに悲しみ傷ついたか〉。ア・カペラ部分の多い内省的なうた。

第4曲〈慈しみ深き聖母は嘆き悲しむ〉、アンダンティーノ。同じく悲しみの歌だが軽やかにさばけて変化をつける。

第5曲〈聖母の姿に涙しない者があろうか〉、アレグロ・モルトープレスティッシモ。第2曲の激情が蘇る。

第6曲〈聖母は御子の息絶えるさまを見る〉、アンダンテ。ソプラノ独唱が聖母マリアの悲嘆を歌い、プロコフィエフじみたエキセントリックな管弦楽の間奏が入る。

第7曲〈愛の泉なる聖母よ〉、アレグロ。第6曲まではキリストの死を目の当たりにする聖母マリアの心理が軸だが、ここからはミサでそれを追体験した信者会衆の祈りのドラマが中心になる。まず悲しみに沈むマリアを励ます元気一杯の聖母賛歌。

第8曲〈わが心も神の子を愛する火に一緒にくべてください〉、マエストーゾ。ほとんどア・カペラの真摯な祈り。

第9曲〈聖なる母よ〉、モデラートーアレグレット。第6曲までのドラマを改めて噛み締める。

第10曲〈キリストの死をともに背負おう〉、サラバンドのテンポで。キリストの受難と死、そしていずれは訪れる自らの死を片時も忘れず生きてゆこうとの決意表明。サラバンドのリズムはここでは死への不断の歩みを象徴するだろう。

第11曲〈焼かれ焚かれるわが身だけれど〉、生き生きとリズミックにーアダージョ・スビト。マリアとキリストの苦しみをこんなに分かち合っている我々信者がきっと天国に行けますように、という歌。

第12曲〈肉体は死んで朽ちるとも〉、アンダンテ。天国に入る希望がいよいよ高まって結ぶ。

PROFILE

Conductor

NAITO AKIRA

指揮:内藤 彰

名古屋大学理学部在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を務めた後、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。

海外では、1991年ベオグラードフィル、1992年にはモスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』、また2001年3月にはサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演している。その他にも2001年12月の北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアー、2003年3月メキシコ州立交響楽団、2010年4月にはメキシコ国立交響楽団の定期演奏会を指揮している。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』公演(東京ニューシティ管弦楽団第34回定期演奏会)にて、日本の伝統的'かね類'(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ'楽器'として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題をさらうことになった。更に2004年7月には、イタリアのプッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新聞・テレビに大きく取り上げられている。

2004年以来ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章をはじめ、交響曲第5番、第9番など新稿の世界初演を果たした。この「ブルックナー新稿の世界初演シリーズ」の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDは、「レコード芸術」誌などで高く評価されている。また、日本初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めている。

2009年1月に初めての著書「クラシック音楽 未来のための演奏論〜くつがえるオーケストラ演奏の常識!〜」を毎日新聞社より出版し、斯界に大きな反響を呼びおこし話題をよんだことは記憶に新しい。

現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。

ソプラノ:百合 道子 Soprano YURI MICHIKO

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程オペラ専攻修了。日本歌曲による独唱会を中心にコンサート活動を行なう。古典芸能の色合いを持つ現代日本歌曲の演奏には定評がある。2003年から2006年まで在仏し、フランス歌曲の研鑽を積む。ミラノ、ローマ、パリ、バルセロナ、及びその近郊で日本歌曲のコンサートに出演、好評を博す。オペラや宗教曲のソリストも多く務め、ソプラノからアルトまで、幅広い役をこなす。プロ合唱団「東京合唱協会」、日本演奏連盟会員。

バス・バリトン:清水 宏樹 Bass Baritone SHIMIZU HIROKI

鹿児島県出身。東京藝術大学卒業後、94年イタリアへ。98年、ブダペスト国際声楽コンクールに2位入賞し、ハンガリー国立歌劇場「ラ・ボエーム」コッリーネ役でバスとしてオペラ本格デビュー。日本では2000年のサントリーホールオペラ「仮面舞踏会」トム役でデビュー。

2002年バス・バリトンに転向。「トゥーランドット」「カルメン」などのオペラのほか、「第九」「荘厳ミサ」「カルミナ・ブラーナ」「メサイア」などのソリストとしても出演する。

エッセイスト・コメンテーター・司会者:南 美希子 Essayist/Commentator/Emcee MINAMI MIKIKO

1956年生まれ。聖心女子大学3年生のときアナウンサー試験に合格。1977年テレビ朝日アナウンス部入社。1986年独立、個人事務所を開設。以来、テレビ番組の司会者、キャスター、コメンテーターとして数々の番組に出演、脚光を浴びる。エッセイストとしても雑誌、新聞などで多くの連載をもち、著作は共著も含めて20冊近くに上る。近著に講談社刊「LOVE握力・恋愛と結婚で失敗しないための50のルール」がある。

その他、クラッシクコンサートの司会、シンポジウムのコーディネーター、講演など、活動は多岐にわたる。講演テーマは「女性の生き方」、「男性論」、「人の心を掴む話し方」、「教育論」、「アンチエイジングについて」などがある。最近は化粧品「エムズ・アップ」、寝具「恋するふとん」など商品のプロデュースにも携わる。主な出演番組に「OH!エルくらぶ」「EXテレビ」「ザ・ワイド」など、主な著書に「男の勘違い」文芸春秋、「お嫁にいくまでの女磨き」光文社、「40歳からの子育て」光文社、「誰にも話さなかった恋」講談社、「オバサンになりたくない!」幻冬舎などがあげられる。